

恐竜型ロボット「PLEO」誕生

ユーゴービー社・開発メンバーインタビュー

米国における今年のクリスマス商戦で、ロボット愛好家の間で最も注目を浴びている商品の1つが、ベンチャー企業のユーゴービー (UGOBE) 社が開発した恐竜型ロボットの「プレオ (PLEO)」だ。14 個のモーターと 38 個のセンサーを駆使し、“本物”の恐竜の赤ちゃんをできるだけリアルに再現したロボットで、ロボットやコンピュータの専門家だけでなく、生物学者やアニメ製作者の力まで結集して実現したもの。本格出荷前の最終調整に追われる同社の研究所を訪れ、開発メンバーにプレオの機能や、製品化にいたるまでの苦労などについて聞いた。

かげきのりこ
影木准子 (米国在住ジャーナリスト)

ユーゴービー社と プレオ誕生のきっかけ

2000年に創業したユーゴービー社の本社はカリフォルニア州サンフランシスコ市の近くにあるが、実際にプレオの開発が行われている同社研究所は、そこから飛行機で約1時間半。アイダホ州の州都のボイジ市近郊にある。ここに研究所を設けた理由は、同社の創業者の1人であり、最初に恐竜型ロボットを作ろうと考えたケイレブ・チャン (Caleb Chung) 氏がもともと住んでいたからだ。チャン氏は1998年に一世を風靡したインタラクティブ玩具「ファービー」の生みの親。その後、勤めていた大手おもちゃ会社は恐竜型ロボットを手掛ける気がなかったため、独立して自分の会社を興した。

チャン氏が自分のアイデアを具現化するために最初に声を掛けたのが、現在、ユーゴービー社の最高技術責任者 (CTO) であるジョン・ソソカ (John Sosoka) 氏だ。この日、訪れた研究所では、ソソカ氏のほか11人の技術者が働いていたが、同氏はそれぞれをロボットのハード担当者、ソ



ソソカ氏の肩に頭をすり寄せるプレオ

フト開発技術者、ビデオゲームのアニメーションの専門家、アーティスト、と次々に紹介してくれた。プレオは生後2週間の「Camarasaurus」という本物の恐竜の遺骨を実際に測定して、できるだけリアルに再現しようとしており、生物学者の協力も得た。研究所には「多い時には社外の関係

者も含め25人くらいいることもあるのだが、今は何人か中国の工場に行っている」とソソカ氏は言う。

プレオの機能

重さが約1.5kgのプレオは、抱えてみると見た目よりも軽い感じ。ソソカ氏がプ



外から見たユーゴービー社の研究所



研究所の中の様子